日本語調學小史

井上奥本

(一) 總說

この小史は年表解說の爲に書いたものであるから符號の用例抔は殆んど擧げず且つ物理的實驗證明の記述も略してある、因つて是等は夫々原書について調査されたい。本編の材料は相當廣く集めてゐる積りではあるが、尙ほ重要なるものが此の數倍乃至數十倍もあるかも知れない、けれどもその多からぬ中に古今語調學界の大勢は顯はれて居るつもりであるから、强いて之以上を載せる必要はあるまいと思ふ。若し又今後に好資料を得たならば、輕重を見て取捨することもあらう。

此の小史の記述の爲には、普通の語調記號を一ト通り述べて置く必要がある。普通のものとは彼の英語的の法式の事で、此の小史を讀む程の人は必ず知つて居らるゝ筈であるが、念の爲にその表だけを次に擧げやう。

	調名	一音語	二音語	三音語	四音語	……
甲表	全平調	○	○○	○○○	○○○○	……
	節尾調	●	○●	○○●	○○○●	……
	一下調	…	●○	○●○	○○●○	……
	二下調	…	…	●○○	○●○○	……
	三下調	…	…	…	●○○○	……

	音數	全平調	節尾調	一下調	二下調	三下調
乙表	一音語	○	●	…	…	……
	二音語	○○	○●	●○	…	……
	三音語	○○○	○○●	○●○	●○○	……
	四音語	○○○○	○○○●	○○●○	○●○○	●○○○

此の表中○を平聲と名づけ●を上聲と名づける。その音の長さは二音語のものを普通の一長音の長さと見做し、その二分の一を一音語の長さと見て、之を調符の單位とする。平聲のみのものを全平調、語尾のみに上聲あるものを節尾調、其

の他は節を除く以下にある平聲の數に從つて、一下調二下調等と名づける。此の式にては上聲は常に竹の節(フシ)の如くになつて居るから一般に之を節式と呼ぶことにする。此所に一下調二下調等と名づけたのは、後に至つて用言活用形說明や助詞助動詞を含む單語の說明に便宜があるからである。此の節式は元より合理的ではないが、獨立の單語を取扱ふには簡便で、讀者の了解を得るにも都合が好からうと思ふ。

扨英語にアクセントがあり、支那語に四聲がある如くに、國語にも語調といふものがあつて、古くから注意せられて居たやうであるが、之を記載することは文字の使用に熟した後でなければならぬ。我國には久しく文字が行はれて居なかつたが、應神朝に阿直岐•王仁•阿知使主等が來朝して漢字を傳へてから、文學も漸く起り、履中朝には諸國に史官を設けられ、次いで小野妹子を隋に遣はされ、天武朝には新字四十四卷を造るまでに至つた。しかし漢字に習熟すると共に此の新字は次第に廢せられたらしい。次いで和銅五年には國語のままの日本史である所の古事記が撰ばれた。之には神名其他の三十餘ケ所に語調が記されて居る。續いて日本紀•萬葉集等が撰ばれ、國語記載法の發達と共に調符の使用も多くなり、韻文•歌謠の譜と相待つて近世に及んだのである。其後明治維新と共に鎖國主義は撤廢せられ、世界の學術は潮の如くに入り來ると共に、語調の記法も革新の傾向を萌し、山田美妙氏によつて其火蓋は切られた、之が所謂節式である。爾後多少の學說は出たが、甲論乙駁で中々統一の域に達しなかつた。所が大正の初年に入つて伏起式(佐久間氏)框式(編者)等が學界に顯はれ、今や識者は之に向つて批評を試みつつある次第である。其所で先づ語調を記載せる文書中最古のものと稱せらるる所の古事記の略評から始めることとする。

(二) 古事記

古事記は國語のままに讀み得る書籍の最古のもので、それには三十二ケ所に語調が記入してある。之を音數別にすると、二音語十八、一音語十四で、二音語と云つても漢字一字の訓を二音に讀むのである。この他に「命」の字の下に調符を附けたのが一ケ所あるが、之は何かの誤だらうと云ふ說だから除いて置く。之等の調符は「上」又は「去」が本文の右下に記してあつて「平」は一ケ所も見當らない、

その上は上聲を、去は去聲を示して居るものと見られる。其中「上」が三十一で「去」は一ケ所だけである。當時はまだ圈發•點發(符號に○•●等を用ゐること)等が行はれて居なかつたと見える。其所で「上」は他の一般の例に依ると節式の全平(卽ち○又は○○等で、古人は之を●又は●●卽ち全上聲と考へて居る)を意味するものと見るべきであるが、「去」は少し解しかねる。その語例は

宇比地獨上 (ウ•ヒ•チ•ニ)
須比智獨去 (ス•ヒ•チ•ニ)
括弧内は編者之譯

であつて、去聲は漢音では●○であり、吳音では○●であるから、此所は吳音と見て、其字が一字假名ならば上の字と共に○●と讀み、又二字假名ならば其字のみにて○●と讀むべきである。そうすると此のスヒチニは○○○●となつて全く節式の節尾調であるが、江戸時代に出來た釋契沖著の和字正濫抄に「去聲はなまるやうに聲をまはす」とあり又其後に成つた四聲出合集にも去聲は聲をまはすとあるから、つまり語尾の音を高より低へ急降してナマルやうに呼ぶので、其れを除く上の假名は上聲に呼べばよろしいのである。本居宣長氏は契師を祖述して天明年中に古事記傳を著はし、其中に「去は下なり」と斷言されて居るが、斯くては此の語は●●●○卽ち節式の○○●○となるから去聲の意味は表はれて來ない。しかし氏は記傳竣功の直前に漢字三音考を出して、その中に

> 山又は川を一字づつ呼ぶ時はヤは上聲マは平聲、カは上聲ハは平聲なり、又ヤマ カハも連りたる言の上にては平聲なり、ヒムガシ(東)ミナミ(南)など三音四音連りたる言も同じことなり、然るをその連りたる上にて一々假名毎に分けて平上去を定めんとする時はまぎらはしくて分明ならず云々。

と述べて居られるから、氏も四聲の說明には、徹底して居られなかつたと見える。或は一長音の時間内に高より低に降るものは平聲で、それが一短音の時間内に行はるれば之を去聲尾と見るべきであるとの意味であらうが、かう見れば氏の說も誤りではなくて、下行急衰を代表して下向三角形▼を去聲尾の記號と定めたる本編の意見と一致するものと見ることが出來るのである。

次に語尾のニは去聲尾と見るも、何故にスヒチの三字を上聲と見るかと云ふに、例に引いた所のウヒチとスヒチは同調ではなければならぬ、節式では節尾調の尾音を除く上と全平調とは同調であつて、古式でも双方全上であることは後に說く

如くである。然るに伏起式だけが節尾調と全平と完く調子を異にして居るのは、節尾調は物理的實驗に依り、全平調はそれに依らなかつたものであらうか。

元來古事記撰述當時には專ら吳音が行はれて居て、靈龜中には吉備眞備・河部仲麿等の留學があり、天平中には歸化人袁晋卿が音博士に任ぜられ、延曆中には「明經の徒に漢音を熟習せしむ」との令が出たけれども、中々漢音は行はれなかつたらしい。隨がつて古事記も吳音本位であることは本居氏も說かれて居るから、語調も亦吳音の法則に依つたものであらう。佛家にては元より吳音を主として居り、契師は勿論佛家であるからその流を汲んで吳音に屬する去聲の法則を說かれたものと見るべきであらう。

(三) 日本書紀

書紀は漢文體の最古の國史で、日本紀とも單に紀とも呼ばれ、古事記の成れる後八年の養老四年に出來て居る。この書は記事も古事記よりは詳密で、中央に於ては非常に重んぜられて、弘仁・承和・元慶・延喜・承平等の時代には之が講演を行はれた事は史に明かで、從つて各講師が講演に用ゐる私記等も種々出來て居たと見える。釋日本紀には公望私記と云ふのが載つて居り、應永中に髮長吉叟の寫した私記神代卷も其一種であらう。(髮長とは僧の忌稱で、この寫本は弘化年中に至つて人皇卷と共に山根基實と云ふ人が今井似閑の本から寫して居る)。隨つて書紀そのものの傳寫も中々盛んで、正安中の卜部兼方、嘉元中の沙彌蓮惠、及び永和の熱田本、大永の北野本等貴重なものが今に殘つて居り、其他慶長版に神代のみのものと、全部のものとあり、寛文版は最も廣く世に行はれて居る。之等の寫本版本を通覽すると、字音としての四聲は申すに及ばず、編中の和歌百二十六首中百首迄は語調が記してあり、其他內外の人名地名及び古語の主なるものには皆調符が附いて居る。殊に慶長版の內には左の如きものがある。(括弧內は編者の推定である。)

赤足(アカシ)　賀茅原(アサチハラ)
朝日(アサヒ)　足振邊(アシフリベ)
入彥(イリシコ)　仲香花蘂(イカシコヨメ)

兎穗名(ウホナ)　淳川別(ヌカハワク)
木事(コゴト)　多益須(タヤカス)

之等を見るとウホナとコゴトとは節式を示して居て殊にウホナのホに去聲を充てたのは語尾に節あるもの卽ち節尾調の去聲分と同一氣分のあることを示して居る。又イカシコメのイは伏起式のものと一致して居ると見るべきであらう。之等の例は尙ほ多けれど今は略して後日に讓る。又私記中の調符は多くは訓註に施したものである。

以上の歌詞及び訓語の調符は何れも字の左上又は左下に○が朱書してあつて、左上は上聲、左下は平聲であるから、所謂二段式である。稀に去聲(前例の右上の符)があつても其意味は節と同一で、唯常の上聲と趣を異にすることを證するに足るものである。で之等調符の全體を音數順に類別すると次の通りになる、但し去聲は稀であるから之に關するものは略した。

調名	一音語	二音語	三音語	四音語	……
全平調	● ○	●●	●●● ○●●	●●●● ○●●●	……
節尾調	○	○●	○○●		……
一下調	…	●○ ○○	●●○ ○●○	●●●○ ○●●○	……
二下調	…	…	●○○ ○○○	●●○○ ○●○○	……
三下調	…	…	…	●○○○ ○○○○	……

上の表に見える通り大體が節式とは變はつて居る。第一に節式に於ける全平は多くは全上となつて居り、稀に伏起式の如く節より第三番目以上が平聲になつて居るのがある。第二には帶下聲調の節より上は多くは節と同一の上聲であり、稀には節式に似寄つたのもある。第三には、節式で語首に節のあるものを多くの場合に全平に記して居る。之は古式一般に通じた事で、前の本居氏の漢字三音考の說明で其意義は明瞭である。卽ち吳音では英語の字名を呼ぶエー・ビー・シー等の如き呼法を平聲と考へたので、(吾人が漢字典內の字音假名を見て四聲にかかはら

ずに發音を試むる時も亦この呼法である)、國語の平假名を長音的に教ふる時のイー・ロー・ハー等の如き呼法を語尾の上るもの卽ち上聲と見たのである。古人は●○を○○と記し、現代人は●●を○○と記して共に編者の下平式(編者の考にては此の下平は獨立語には認めない、其意義は後に說く)を用ゐたのは去聲の本義が不明であつた爲であらう。之等の關係から●○と○○とを古書中に見分けることがよほど困難である。其他三音の節尾調は稀で、その四音以上のものは見當らないやうである。要するに之等の調符は書紀撰述當時よりはよほど後年に記入されたものらしく、漢字の短音のものや、佛敎の陀羅尼等を參照して發達したものであつて、彼の漢籍の訓點及び經文音義等に用ゐられたものよりは稍新しいものであらう。尙ほ書紀の字訓には圈發・點發の代りに線發とも稱すべき「ー」を用ゐたのもある。之は字音の四聲點及びヲコト點等とまぎれない爲の注意からであらうが、之等と漢文倒讀の爲の反對抔と同時に用ゐられて隨分混雜して居るケ所もある。

(四) 和 歌

文字の活用に熟するに隨ひ純文學の記載も漸次發達して、その最初に顯はれたものが萬葉集である。しかし此頃はまだ調符は用ゐられなかつたやうで、延喜年中に至り古今和歌集が出て後、建久時代には古今集秘傳なるものが起り、藤原定家の著下官集抔と共に追々調符も用ゐられて、文永中弘安中等には下官集の傳寫もあり、嘉元年中には度會延誠等が京都にて古今集の訓點を受けて居る、(此の書は古今訓點抄と云つて、此の種の歌書中最も多く調符を記したものである)。又僧珍範は天德年中に下官集を京都三條殿に寫し、降つて文明中に至り宗祇の出づるに及んで秘傳主義は益々盛んとなり、此際の古今集註釋(後成恩寺云々)等も出來、慶長年中細川幽齋の頃は其極に達して、寛永年中に寫した和歌三部抄等には、和歌作者の位階・官職・姓名に至るまで調符を施し、漢字にて施點に不便なる時は、その傍に片假字を添へて其の假名に施點したものさへ少なからずある。しかし之等の施點法は何れも日本書紀のもの以內であるから、改めて記すべき問題はない。元來調符の轉寫は誤り易いものであるに、歌集は主として平假字の聯綿書きであるから尙更誤りが多いやうである。

(五) 悉曇系其他

平安遷都後間もなき延曆年中には空海最澄等の諸師は唐に留學し、僧圓仁も承和年中に留學して居る。空海は歸朝後弘仁中に文鏡秘府論を作られたが之は支那人が作文作詩に用ゐる四聲の法則を記したものである。同師は漢學のみならず甚だ悉曇に委しく、實に之を焦點として眞言宗なるものを起されたのである。次いで僧安然は元慶中に悉曇藏を撰述して、此の學は益々盛んになつた。從つて承曆中には金光明最勝王經音義、寛治中には類聚名義抄抔が相次いで出來た。この音義には漢字音の音尾の M・N・NG の區別及び「和音上聲去聲隨便相通」等の記事があるのは大いに注意すべきで、澤山の和訓の調符をも載せてある。

類聚名義抄は元慶中に薨じた菅原是善の著と云はれて居て、現代の畫引字典に似たものである。その字訓は國史漢籍佛書の全體に亘り、字音假名は勿論和訓に施點したもののみにても約一萬六千に達して居る。其點法は書紀・和歌等と均しく、稀に去聲點を施したものもある。之等の書の常として熟語は語原的に施點したものが多く、助詞ヲ・ニ・ハ等は多くは上聲とし、動詞に助詞を附した場合にも動詞本來の調を用ゐて居る傾きがある。殊に

ナカレ、ナミス、ナクモガのナ	(無)
ヨシ、ヨウス、ヨク、ヨミスのヨ	(善)
フ、ヘタリ、ヘテのフ又はヘ	(經)
ミオロス、ミハル、ミヨのミ	(見)
メアハス、メカツラ、メケモノのメ	(雌)

等の語首のナ・ヨ・フ・ヘ・ミ・ナ等が常に去聲に一定して居るのは注意すべき點であらう。之等は夫々ナシ・ヨシ・フ・ミル・メの時去聲を以て示してあることを思へば前例は畢竟語原的に記されたるものである。要するにこの名義抄は甚だ貴重なる辭書として斯道の人に愛せられ、仁治・建長年中以下文化・天保時代に至る迄、或は書寫せられ、或は索引を作られなどして居る。但し嘉永三年版伴信友著「假字本末」に「左の上中下に去上平の點がある」としてあるのは如何なる原書を見られたるにや、編者の見た觀智院本には前述の通りになつて居る。

元弘頃に出來た「文字反」と題せるものに五十音圖を載せて、之を一行每に讀

ませて四聲を練習せしめる爲と見えて、アイウエの四列を上聲とし、オ列だけを去聲として居るが、之は各行を●●●●○と讀むのではなくて●●●●▶と讀ませる爲であらう。關東では多くは○○●○○と讀むとのことであるが、編者の地方では●●●●○であり、若狭方面では文字反の如く●●●●▶と讀んで居るやうである。この文書に四聲を說明して

平聲　タヒラカナルコヱ　　上聲　アガルコヱ

去聲　サルコヱ　　入聲　イリテサガルコヱ

と述べてあるが、佛家一般の說では平聲入聲は畢竟同一の呼法なりとして居るから、平聲はつまり下る聲であつて、(是は前記の本居氏の說にも明である) サルコヱと云ふのは下る事とは別の意味を具へて居て、上聲に近いものであると見ねばなるまい。卽ち古事記のスヒヂニを●●●▶と讀むのとカキクケコを●●●●▶と讀むのと同調で、何れも正しき節尾調としての讀み方である。

延久年中に出來た史記（狩野享吉氏藏）は經籍の和訓に調符を附したものの內で最も古きものに近からう。續いて永萬中の香藥抄（田中光顯伯藏）弘安中の春秋經解（宮內省藏）正和中の古文尙書（豐宮崎文庫藏）康和中の遊仙窟（醍醐寺三寶院藏）永正の史記（宮內省藏）等追々其の施點の方法が進んで居るやうである。應永の平家物語（松井簡治氏藏）は片假名交りの文中の特定の語を片假名にて記し、之に圈發を施したもので、その體裁は異例ではあるが、語調としては特別のものではない。

元祿中に出來た悉曇字記捷覽は唐の智廣の悉曇字記を註釋したものであるが、梵音漢音吳音等の關係を探るには必要である。尙ほ天保中に出た天台版勢州本で宗淵摹の法華經は訓語は載せて居ないけれども、四聲の法則及び陀羅尼に關して參考となる點が多い。

釋契冲は此系統に屬する大家で、實に近世國語學の開祖である。師は萬葉集を基として深く研究せられ、元祿六年には前記の和字正濫抄を著はし、續いて和字正濫通妨抄•和字正濫要略等を出して居られる。和字正濫抄には

平聲は聲の本末あがらずさがらず一文字の如くして長し、

上聲は短かくしてすぐにのぼる、

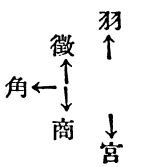
去聲はなまるやうに聲をまはす、

入聲は下にふつくちきの音ありて切直なり、

とあつて、種々の例を擧げてある。又通妨抄には平上去三聲の區別を示す爲百餘の長音和語が擧げてあるが、(一音節の短音名詞は獨立の時長音に呼ぶを通則とする、現代の近畿地方も土着人は皆之に依つて居る)之を音聲學協會報第四•五號に出た森正俊氏の報告に較べると、同語五十二箇の中の四十八箇迄は三聲の區別が一致して居る。時代は二百年を經、地は五十里を距てて、僅に一割未滿の差のみとは、語調の保守力も亦大なる哉である。因に、編者の地方には現在では長音•撥尾音共に去聲の例がないが、彼の森氏の住所伊勢地方には盛んに用ゐられて居るとのことである。

(六)　伽陀假博士

佛家では佛を讃嘆する爲に稱名•梵唄等の多數の謠物があり、祭文•論議等の多數の讀物があつて、之等を讀誦する爲に要する譜は四聲點のみにては用を充たさないので、久しく横笛•箏曲•琵琶等の譜を用ゐて居たが、文永年中に至つて僧證蓮房覺惠が始めて簡便なる譜圖を案出したので、從來の曲譜記法は忽ち廢れてしまつた。覺惠が案出した譜を五音聲譜伽陀假博士と稱し、略して假譜と呼んで居る。此方法は左圖の如きものであつて、之を應用するには角を平聲、徵(チ)を上聲に充てるのであつて、此の方式は年を經ると共に盛んに用ゐられて、四座構式にも應用せられ、諸祭文•論議等に及び、以後高野山にては朝譽•融傳•榮融（榮融より理峯へ聲明を傳へたのは元祿年中である）理峯•康峯等に累傳して天明時代に至り、實光の假譜に於てその梵唄應用の模範圖を大成したのである。



四座講式は明惠上人（寬喜頃の人、名は高辨）の著で、眞言宗にては「之を學べば聲明學の大部分を解し得る」として居るほどで、字音そのものの四聲各別の定則及び助詞助動詞との關係は勿論、訓語に於ては一音語の二類、二音語の三類、夫れらの助詞助動詞との關係、從つて助詞に語調的類別のあること等は皆活用の間に顯はれて居る。殊に所謂去聲形の訓語と助詞との關係が、字音のそれの場合と其の定則を異にして居るが如きは大いに考ふべき點で、前の金光明最勝王經音

義に「和音上聲去聲隨便相通」とある如く、字音の去聲は助詞との關係に於て上聲と同一に扱つて居るのである。然るに去聲形の和語は之に反して、現代語の關東關西一般に通じて顯はれて居る如くに、その助詞との接續法を他調の語と異にして居るのである。

貞享年中には智山（眞言宗新義）の觀應は假譜を應用して其宗の讀經原則と各派の用例とを記した所の「補忘記」なるものを出版して居る。それに依ると、漢字單獨の調、熟語の調、固有名詞の調、同調重出の場合の心得等に及び、更に假名聲（純國語）の原則、助詞助動詞の定則に就いて述べてある。之卽ち日本人にして日本語調の定則を說き、助詞の定則にまで及ぼしたものの最古のものであらう。その中に「和語の譜は平聲上聲の二つに限る」とあるのも重要なる點である。是は去聲尾の呼法が音階に入り難い點からでもあらうが、或は和語の去聲の意義が明瞭でなかつた點からでもあらう。尙ほ此の書には「平聲の輕(カル)」なるものを說いて、平聲を○○と●○との二種に使用して居る。そうして「平聲の輕とは本來と押したるものなり」と云つてある。卽ち英語の發音に「アクセントとは少しく調子を押し付くる事」とあるのと同義で、英語の中でアクセントなき音節の呼法は平聲○○に當り、そのアクセントあるものは平聲の輕卽ち●○に當るのである。かう見ると節式は全く英語にあてはまることになる。又本書の末尾には論議の讀例をも多く載せてある。

安永年間に僧增仁諦中房の寫した假名聲集も亦此の系統に屬して居て、多數の訓語や助詞助動詞の用例をイロハ順に集めたもので、それには一音語二音語の聲類を各一所に集めて其本性の異なる點を示したケ所もある。從來○○を以て其調を示された單語は多くは此頃より●○を以て標され、又○●の●●に變はつたものも少なくない。之等は前述の平聲の輕の意義や最勝王經音義の「上聲去聲隨便相通云々」に關するものであらう。兎に角此の假名聲集に擧げた語數は約二千で隨分參考に價するものがある。僧良道大忍が文化年中に寫した「四聲出合秘傳集」は前記の補忘記其他各家の私記を集めたものらしく、記事は補忘記以上に出ては居ないが、又參考となるケ所も無いではない。唯各記事間に疎通を缺くらしい形跡が見えるのは雜集ものの常として免かれぬ所であらう。近年は彼の假名聲集とこの出合集とを合綴した本もある。

謠曲は假譜發明後約百年の室町時代から始まつたと云はれて居るが、足利義滿は既に猿樂（謠能）を觀たと歷史にもあり、續いて觀世•金春•寶生•金剛の四座も起つたとの事であるから、その讀本の施點も或は假譜から飜案したものではなからうか。勿論當代の佛敎から取入れた思想も文句も多く、譜點の形狀名稱等も酷似して居る。後日享保年間に時中翁の著はした音曲玉淵集には謠曲發音上の開合等を委しく說き、掛合の詞の譜譜をも多くの例が揭げてある。謠曲としては曲譜の種類も多いが、詞の調符にはその中の「—」「′」とを用ゐて居る。橫線は上聲で斜線は下聲に當るのである。要するに謠曲に於ても語調は上平の二聲主義である。

（七） 古 式 雜 家

文雄無想師は當時に於ける音韻學の權威で、延享年中に磨光韻鏡を出され、其後寶曆に和字大觀抄、明和に同再刻、安永に磨光韻鏡指要錄刊、行寬政に和字大觀抄の補刻が出來て、此の補刻にはイロハ歌の語調や古今和歌集假字序の調抔も載つて居る。けれども氏の四聲觀は當時の支那卽ち淸朝の杭州音に依られたとの事であるから、從來の漢音說吳音說等とは趣を異にして居て、甚だ解し難い、隨つて氏の調符應用例は捕捉し難い。加ふるに氏は獨創的の假字文記法を用ゐられたから尙更である。

寺島良安氏は正德中に和漢三才圖會を出して、それに和語の四聲の說明をして居られるが、之は磨光系ではあるけれども極單純である。從つて參考する程のものもない。安永中の藤井常枝著の和漢字名錄は本居系であるが、之も取立てて云ふべきものなく、唯文化五年に刊行された六聲發揮は宮本準龍著とあつて、母音に六種ありとの說を立て、同時に國語の聲調の事を稍委しく論じて居るから、之は參考すべき點があるやうである。

（八） 古 式 槪 括

古式の語調記法は以上の如く種々で、之をまとめて見ると略ぼ下表のやうである。要するに之等は皆漢字の四聲に依つたが爲にその符號を國語に適するやう運用する點に於ては後日稍進步したけれども、其基礎觀念の不備は遂に去聲を捨て

音數	全上調	節尾調	一下調	二下調	三下調
一音語	● ○	○ ▶	…	…	…
二音語	●● ○●	●○ ●▶	●○ ○○	…	…
三音語	●●● ○●●	○○● ●●▶	●●○ ○●○	●○○ ○○○	…
四音語	●●●● ○●●●	○○○● ●●●▶	●●●○ ○●●○	●●○○ ○●○○	●○○○ ○○○○
五音語	●●●●● ○○●●●	○○○○● ●●●●▶	●●●●○ ○○●●○	●●●○○ ○●●○○	●●○○○ ○●○○○

備考　節尾調の內▶・●▶・●●▶は名義抄、●●●▶は古事記、●●●●▶は文字反に見ゆるもので、名義抄には此の他に▶○・▶○○・▶○○○・○▶○・○○▶等があり、名義抄と書紀とには○▶○もある。

て平上のみを用ゐること補忘記の如くになつたものであるらしい。從つてアクセント二段觀に歸着して居る點は古今同一で全く誤りと云ふべきでもないが、二段觀の範圍內で去聲を運用すると云ふ事の起らなかつたのは惜むべきである。さる代りに現代の節式・伏起式・框式等の何れをも含んで居るのは大いに面白い點である。

（九）　節　式　其　他

我國の語調學は明治に入つて西歐文學の輸入と共に大動搖を起した。そうして遂に簡明なる形式を採つて顯はれたのは彼の節式である。節式卽ち英式は發端にも表を揭げた通り甚だ簡潔である。そうして單語の調の種類は過不及なく此の中にまとめられて居る。最初に之を取扱つた人は彼の口語文宣傳者山田美妙氏である。氏は明治二十五年に日本大辭書を著はすに當り附錄として三段十五頁に亘る日本音調論を書いて、用言の活用までに及ぼして居る。近年の學者は大抵此の式に依つて居る。岡倉氏の發音學講話、島村氏の新美辭學、高橋氏の國定讀本發音辭典、日本のローマ字社の國定讀本の讀方、榮田近藤兩氏合著のローマ字索引國漢辭典、今村明垣氏の東京辯、神保氏のアクセントの研究等皆然りである。露國人ボリワノーフ氏は大正五年にアクセント研究の爲來朝して、大いに山田氏を讚

して居るし、同八年の安藤正次氏の「奧羽の言葉について」の論文も亦之に依つて居る。但し此の論文中に「弘前邊の言葉ではハナ（鼻）のナの子音だけが高くて母音が低いと云ふやうな發音が行はれ、殊に女子に著しい現象である」とあるのは注意すべき點であると思ふ。或は之は編者の云ふ▶卽ち去聲尾ではなからうか。さるにても此のナの位置に單母音の短音が來た時にはどうなるであらうか。

明治二十七年には落合直文氏の日本大文典が出て、語調に關する記事はあるけれどもその解說は捕捉し難い。翌二十八年に出た佐藤寬氏の本朝四聲考には韻學私言といふものを引用してあつて大いに參考に價する。又同四十四年に出た伊澤修二氏の國定小學讀本正讀法は獨創的で、ベルの視話法及び吃音矯正等から着想されたものと見えるけれども、遂に世人の了解を得るに至らなかつた。外に同四十二年に出た大矢透氏の「假名遣及假名字體沿革史料」は目的は假名にあるけれども、摹刻の結果古代の多くの語調符が顯はれて居るので、歷史的研究の爲には有用である。

佐久間鼎氏は大正四年に雜誌「心理研究」に「日本語のアクセント」なる論文を出され、其後國定讀本のアクセント・東京語のアクセント・國語のアクセント・國語の發音とアクセント・國語アクセント講話等の多數の著書論文を發行されて、大正八年頃には文部省の名に於てアクセント學講習會をも開いて居られるが、何うも徹底し難いやうである。氏は既に物理學上の實驗をも經て居られるにかやうに徹底しかねるのは恐らくは編者が東京辯に熟しないのと、豫期意向に制せられて居るからであらう。氏は古式の如く、所謂節式の節以上には上聲を用ゐながら、全平調なる一種を保存して節式に一致せしめて居られる。又氏は節式に云ふ平聲・上聲を中聲・上聲と稱して、別に下聲なるものを設けて之を多くの單語の初頭に充てて居られる、依て編者は氏の式を伏起式と名づけて居る。今氏の上聲を●、中聲を○、下聲を◁として全表を記すと次の通りになる。

音數	全平調	節尾調	一下調	二下調	三下調
一音語	◁	●	…	…	…
二音語	◁○	◁●	●○	…	…
三音語	◁○○	◁●●	◁●○	●○○	…
四音語	◁○○○	◁●●●	◁●●○	◁●○○	●○○○

五音語　◁○○○○　◁●●●●　◁●●●○　◁●●○○　◁●○○○

今之を古式及び節式と對照して見ると左の如き種々の疑が浮ぶのである。

第一　伏起式では一般に語首の音を特に低しと立ててあるけれども、此の場合は無言安靜の位置から發音を始める順序として向上的であると云ふべきのみで、第一音が常に低しと云ふべきものではなからう。であるから東京生へぬきの宮田幸一氏抔も之を低しと見る必要はなからうと云つて居られる。又古式に伏起式と似たものがあるけれども、あれは平聲及び去聲の觀念の誤謬から來て居るので、その立場を異にして居るやうである。

第二　古式では節と框と二重の觀念を以て上聲を扱つて居り、節式では節の意義のみに決定して居るやうであるが、伏起式では節とそれ以前とが同一の上聲となつて居るから一寸見ては妙に感じられる。或は節そのものの意義が特別なのであらうか。

第三　古式の全平は語首に節あるものを意味することは明であるが、節式と伏起式との全平は古式の全上に相當して居る。然るに之を全平として扱ふ故は、全平を全上とすると、彼の節尾調と同記號となつて困難に陷るからであらう。しかし節尾調の語尾には編者の說の如く特別の符號を用ゐれば何の矛盾も起らないのである。元來伏起式では節ある調の節より上に上聲符を用ゐて實驗の結果と古式とに近づき乍ら、節そのものの本性を決定して居ないやうである。節より上の上聲の集りを中途にて切斷した時の呼び方は何を示すかと云へば、之は全く全上であつて、しかも從來全平と稱する所のもので、決して節尾調は成立しないであらう。

第四　節式では節を除く上下に常に平聲符を用ゐて居るけれども、一下調二下調等の語尾より全平の語へ接續する時には、前の語尾の音は常に次の語首の音より低いであらう、然るに節式にては此の語尾と語首とが同一の符號となつて居るから重なる語調の一要件が顯はれて來ない。たとへば●○○と●●●とを續けて讀む時節式では●●●が○○○となつて居るから、二語の連續の結果は●○○●●●とならずに●○○○○○となつてしまふのである。

第五　古來の方式では所謂全平を全上と見て居るから、大概の場合に助詞助動詞の本性を表現して居るが、節式・伏起式等では此の場合に說明の困難に陷る故、

從來之等補助詞の語調的定性論が成立して居ないのも不思議ではない。

（十）　總　　評

以上新古の語調形式を統合して考へて見ると、先づ定むべきものは單純なる二段式である。之を表に作ると左の通りになる。

	音數	全上調	一下調	二下調	三下調
單純二段式	一音語	●	…	…	…
	二音語	●●	●○	…	…
	三音語	●●●	●●○	●○○	…
	四音語	●●●●	●●●○	●●○○	●○○○
	五音語	●●●●●	●●●●○	●●●○○	●●○○○

右の表の●は上聲、○は下聲と名づける。そうして上聲には節（フシ）の意味（卽ち去聲尾の意味）を含ませない事とする。そうすると上聲の連續した部分が上聲面で、下聲の部分は下聲面である。丁度上下二床に分れた室の上床と下床とであのて、從來節と思はれて居た一音は此の上床面の下床に接する部分卽ち框（カマチ）である。因て此式を框式と呼び、或は便宜上編者の式全體をも框式と呼ぶのである。國語の單純語には語尾より外には節的のものはない。若し中途に節があるやうに思つたならばそれは上床の框である。節式が之を誤つたのは英語の解釋から來て居り、古式が之を誤つたのは去聲の解釋から來て居るが、何れも同一點に於て躓いて居る。契冲師・本居氏抔は此の點に於て誤つたままの澤山の語例を擧げて居られる。

古今の語調に於ける節なるものの本義は一短音の時間內に調子の急降するものとの認定を以て編者はその符號を▶と定めて居るが、東京方面では之を急昇する意義だと說く人もあるやうだから、若しそれならば▶の代りに◀を用ゐたならばよろしからう。强いて水平と昇降とを混同する必要はなからうと思ふ。今は古說及び編者の地方の呼法に從つて▶を用ゐることとする。そうして此の節を有する單語の形式を集めると▶・●▶・●●▶・●●●▶等であつて、節は語尾のみにあるのである。之が卽ち節尾調である。

右の節尾調に助詞助動詞が接續する場合には多くは一下調・二下調等の形式と

なることは古今東西同様である。その符號は次の表の如くで、此の一下調・二下調等と前の純二段式の一下調二下調等とは夫々同一の呼法なのである。是卽ち異因同果である。その理由は節の部分が急降であれば次の補助詞は從屬的のものであるから主語の勢ひに從つて下降せしめられると見るべきである。萬一節が急昇的のものならば其主語が自己の高さを顯著ならしめんが爲に次の補助詞をして降らしめるとも云ひ得る。要は實驗に基く證明に讓るべきである。

音數	一下調	二下調	三下調
二音語	▶○	…	…
三音語	●▶○	▶○○	…
四音語	●●▶○	●▶○○	▶○○○
五音語	●●●▶○	●●▶○○	●▶○○○

右の次第であるから節尾語の下へ他の獨立語が來てもその獨立語の調子は變化しない。然るに補助詞には前に云ふ如く節尾語の下のみで下聲となるものと、何れの主語の下にても下聲となるものとある。勿論補助詞も單獨に呼ぶときは他の單語と同じ形式に含まるるけれども、指定助詞のト、並列助詞モ(亦)、否定助動詞ズ(不)等は京阪地方では古今共に何れの主語に附屬しても下聲である。之等の下聲のものを全下調と稱して一種を立てることにすると○・○○・○○○・○○○○等の形式となる。卽ち之等の全下調は夫々獨立語に於ける下聲分と同一の呼法でなければならぬ。補助詞には以上の如く種々の特性があるから、之を主語と離して書くと補助詞も獨立的に呼ばれることになつて實際の調子を顯はさない事になる。それ故に語調上からは所謂分別書きを好まないのである。編者は出身地に於ける全下調の單語を多數調査して整理して居るけれども紙面の都合上今回は略して置く。

以上純二段式と節尾語に關するものと全下調とを一式に編入すると次の通りなる。

音數	全上調	節尾調	一下調	二下調	三下調	全下調
一音	●	▶	…	…	…	○
二音	●●	●▶	●○ ▶○	…	…	○○

三音	●●●	●●▶	●●○ ●▶○	●○○ ▶○○	…	○○○
四音	●●●●	●●●▶	●●●○ ●●▶○	●●○○ ●▶○○	●○○○ ▶○○○	○○○○
五音	●●●●●	●●●●▶	●●●●○ ●●●▶○	●●●○○ ●●▶○○	●●○○○ ●▶○○○	○○○○○

右の表に依れば普通の國語の調子は、殆んど過不足なく正しく記し得るであらう。もし英語的の呼法ならば▶の代りに ‖▶ を用ゐたならばよろしからう。そうして●を節より前に用ゐ、○を節より後に用ゐるのである。英語の節は國語のものよりも高くて、その節の前と後とが高さを異にすることは定說であるから是で英語は完全に寫されるであらう。しかし之は理論としての事で、且つ國語に較べての事であるから、實用には矢張り從來のものがよろしい事は申すまでもない。

要するにアクセント研究は歷史的のものではなくて科學的のものである。隨つて現代語を物理的に實驗して後に參考の爲に古書を繙くべきである。編者も之が爲に實驗器械を二種計り作つて應用した所が其の結果は皆豫想に一致した。その寫眞と說明は大正十年の國學院雜誌に載せ、當協會にも一部を寄贈してあるから有志の方は御覽下さい。補助詞の定則抔は久しく卑見を持つて居たが、古書から發見したのは昨冬の事である。編者の意見は決して復古主義ではなくて、現實に基づいて定見を立て、之に據つて古書を讀破したものである。只微力にして調査に不備の點も多かるべく、材料に誤解の廉も少なからぬであらう。讀者諸氏は之等の事を御指摘下さると共に、何卒實驗に出發して古今の問題を究められんことを吳々も望む次第であります。(終)

日本語調學年表

井上奥本

皇紀

944 應神 15 阿直岐百濟より來朝す
945 同 16 王仁百濟より來朝論語千字文を献ず
949 同 20 阿知使主來朝す
1063 履仲 4 諸國に史官を置く
1267 推古 15 小野臣妹子を隋に遣はす通事鞍作福利
1268 同 16 小野妹子歸朝す
1342 天武 10 境部石積勅を奉じて新字四十四卷を撰す
1372 和銅 5 古事記成る稗田阿禮口授太安麿撰 「留學す
1376 靈龜 2 吉備眞備阿倍仲麿等唐に
1380 養老 2 日本書紀成る、舍人親王撰 「す
1395 天平 7 歸化人袁晉卿を晉博士と
1395 同 7 吉備眞備等歸朝す「持撰
1419 天平寶字 3 萬葉集成る、大伴家
1435 寶龜 6 吉備眞備薨ず 年八三
1445 延曆 4 大伴家持薨ず 年五七
1452 同 11 明經の徒に漢音を熟習せしむ
1454 同 13 平安遷都
1464 同 23 僧空海最澄等唐に留學す
1465 同 24 僧最澄歸朝す
1466 大同元 僧空海等歸朝す
1472 弘仁 3 多人長日本紀を講ず
1480 同 11 文鏡秘府論成る僧空海撰
1496 承和 3 僧空海寂 年六三
1498 同 5 僧圓仁唐に留學す
1503 同 10 菅野高年日本紀を講ず
1507 同 14 僧圓仁歸朝す
1524 貞觀 6 僧圓仁(慈覺)寂 年七一
1538 元慶 2 善淵愛成日本紀を講ず、元慶六年竟る
1540 同 4 僧安然悉曇藏を撰す
1540 同 4 菅原是善薨ず 年六九
1564 延喜 4 藤原春海日本紀を講ず、延喜六年竟る
1565 同 5 古今和歌集成る紀貫之撰
1575 同 15 僧安然寂
1596 承平 6 橘仲遠日本紀を講ず、天慶六年竟宴を行ふ
1606 天慶 9 紀貫之卒 年六五
1733 延久 5 史記(狩野享吉氏藏寫本)成る
1739 承曆 3 金光明最勝王經音義成る
1750—1780 寛治 類聚名義抄成る、菅原是善著と云ふ 「本)成る
1825 永萬元 香藥抄(田中光顯伯藏寫
1850—1900 建久 古今集秘傳(京都帝國大學藏)成る
1852 建久 3 源頼朝將軍となる
1892 寛喜 4 明惠上人(僧高辨)寂、眞言宗四座講式の著者
1901 仁治 2 藤原定家薨 年八〇
1901 同 2 僧慈念加茂庵室に於て類聚名義抄交交點畢る「す
1911 建長 3 僧顯慶類聚名義抄を寫了

1924—1934 文永 僧證蓮房覺惠(覺意)五音博士圖を案出す
1926 文永 3 某氏新大納言爲氏所藏の下官集(又名下官抄)を寫す 「本)成る
1938 弘安元 春秋經傳解(宮內省藏寫
1944 同 7 僧信昌、靈山法印の下官集を寫す
1946 同 9 藤原爲氏薨 年六五
1962 正安 4 卜部兼方日本書紀を寫す
1964 嘉元 2 沙彌蓮惠日本書紀を轉寫す
1965 同 3 度會延誠等京都に於て古今訓點抄を作る(卷子本)
1974 正和 3 古文尚書(豐宮崎文庫藏)成る 「殿御所に寫了す
1989 元德元 僧珍範下官集を京都三條
1990—2000 元弘 文字反(一名反音)成る
1996 延元元 北帝立つ、足利尊氏將軍
2004 康永 3 遊仙窟(醍醐寺三寶院藏)成る
2036 永和 2 熱田本日本書紀成る
2040 頃天授 此頃足利義滿猿樂(謠能)を觀る 「成る
2080 應永 27 平家物語(松井簡治氏藏)
2088 同 35 髮長吉叟日本紀私記神代卷を寫す 「(古今集抄)
2131 文明 3 宗祇古今集の講義を初む
2141 同 13 藤原兼良薨ず 年八〇(號後成恩寺) 「る
2141 文明 13 古今集注釋(寫字堂本)成
2150 延德 2 古今集注釋追加了る
2162 文龜 2 宗祇寂 年八三
2171 永正 8 史記(宮內省藏本)成る
2174 同 11 古今集注釋加筆(秘抄云々)
2185 大永 5 卜部兼永北野社頂神祇大副となる後日本紀を寫す
2259 慶長 4 日本書紀神代卷版行
2263 同 8 德川家康將軍
2270 同 15 日本書紀人皇卷版行
2270 同 15 細川幽齋歿 年七七
2284—2303 寛永 和歌三部之抄(藤原定家著)傳寫
2329 寛文 9 日本書紀流布本板行
2347 貞享 4 補忘記(聲明要集)刊行、東關沙門觀應輯 「著
2353 元祿 6 和字正濫抄成る、僧契沖
2357 同 10 和字正濫通妨抄成る、僧契沖著
2357 元祿 10 僧榮融聲明を理峯に授く
2358 同 11 和字正濫要略成る、僧契沖著 「觀著
2358 元祿 11 悉曇字記捷覽刊行、僧周
2361 同 14 僧契沖寂 年六二 「寫す
2369 寶永 6 今井似閑和字正濫要略を
2372 正德 2 和漢三才圖會成る、寺島良安著 「成る、時中翁著
「享保 晉曲玉淵集(謠曲玉淵集)
2380—2390
2404 延享元 磨光韻鏡成る、僧文雄著
2410 寛延 3 僧理峯四座講式に序す(假名抄集口授者) 「著
2414 寶曆 4 和字大觀抄刊行、僧文雄
2418 同 8 僧理峯の高弟廉峯四座講式を校定す
2423 同 13 僧文雄寂 年六四
2427 明和 4 和字大觀抄再刻

2429 明和 6 語意考成る、加茂眞淵著
2433 安永 2 磨光韻鏡指要錄刊行、僧文雄著
2435 同 4 和漢字錄名成る、藤井常枝著 「寫す
2440 同 9 僧增仁諦中房假名聲集を
2443 天明 3 高野山寛光五音假譜を記す 「長著
2445 同 5 漢字三音考成る、本居宣
2448 同 8 古事記傳成る、本居宣長著 「今集假字序に點す
2455 寛政 7 和字大觀抄補刻成る、古
2461 享和元 本居宣長歿 年七二 「著
2468 文化 5 六聲發揮刊行、宮本準龍
2472 同 9 僧良道大忍四聲出合秘傳集を寫す
2473 同 10 伴信友類聚名義抄を寫す
2474 同 11 同人類聚名義抄字訓索引を著す 「田與清著す
2493 天保 4 類聚名義抄索語成る、高
2495 同 6 勢州版法華經成る、普賢院宗淵摹
2505 弘化 2 山根輝實今井似閑の本に依て日本紀私記神代卷を寫す
2506 弘化 3 伴信友歿 年七四
2506 同 3 山根輝實今井似閑の本に依て日本紀私記人皇卷を寫す
2510 嘉永 3 假字本末刊行、伴信友著
2519 安政 6 僧宗淵寂 年七四
2552 明治 25 日本大辭書成る、山田美妙齋著 「文著
2554 同 27 日本大文典成る、落合直
2555 明治 28 本朝四聲考成る、佐藤寛著(韻學私言引用)
2561 明治 34 發音學講話成る、岡倉由三郎著 「郎著
2562 明治 35 新美辭學成る、島村瀧太
2564 同 37 國定讀本發音辭典成る、高橋龍雄著
2569 明治 42 假名遣及假名字體沿革史料成る、大矢透著
2571 明治 44 國定小學讀本正讀法成る伊澤修二著
2572 明治 45 國定讀本の讀方成る、日本のローマ字社編
2575 大正 4 日本語のアクセント、佐久間鼎氏論文雜誌心理研究に出づ
2575 大正 4 ローマ字索引國漢辭典成る、榮田猛猪近藤久吉合著
2575 大正 4 東京辯成る、今井明恒著
2576 同 5 アクセントの研究、神保格論文雜誌國語教育に出づ
2576 大正 5 語調原理序論、井上奥本論文、國學院雜誌に出づ
2576 大正 5 國定讀本のアクセント、佐久間鼎論文雜誌小學校に出づ
2576 大正 5 東京辯のアクセント、佐久間鼎論文雜誌心理研究に出づ
2576 大正 5 露國人ボリワノーフ來朝し、山田美妙齋の型式を讃す

2577 大正 6 國語のアクセント成る、佐久間鼎著
2579 大正 8 奥羽の言葉に就いて、安藤正次論文、雜誌國語教育に出づ 「佐久間鼎著
2579 大正 8 國語の發音とアクセント
2581 大正 10 語調の基礎と其の形式、井上奥本論文國學院雜誌に出づ 「久間鼎
2583 大正 12 國語アクセント講話、佐
2587 昭和 2 新しいアクセント觀(宮田幸一)音聲の研究第一輯、音聲學協會刊行

日本書記寫眞解說

井上奥本

是は永和二年に出來た熱田神宮所藏の卷子本日本書紀第十五卷弘計天皇の條の一部である。訓符は皆横線を用ゐて朱書してあるから寫眞には淡く映つて居る。語訓は本文と割註とにあるから之を本文のものを初にして並べると左の通りである。

(一) 伊儺武斯廬哿簸泝比野儺擬寐逗愈凱
磨儺弭企於巳陀智曾能泥播宇世儒

(二) 干魔羅儞烏野羅布屢柯倭

(三) 左烏子加

(四) 陀那則擧謀耶羅々儞

(五) 陀豆々

解(一) イヂは平々なれど原則に依り●○と讀むべきである。ムシロとナビキは所謂伏起式であるから何れも●●●と改むべきである。カハソヒヤナギとソノとは全上調である。ミヅは●●の誤り。但しユケバ迄の伏起式か。ユケバのバ(者)は全下調の一である。オシの調は●○の誤りで他に證據がある。タチは去聲。ウセズのズ(不)も下聲でなければならないのに、此所に上聲となつて居るのは誤寫と見える。ハネのネ(根)は一短音節尾調で、此所ではハと共に▼○となるべきだが、古人は●○を長平、▼を短平と考へて居て、ネを平としたものである。ハ(者)は「ヲニハ上」の規則に依り常は上聲とするのであるが、此所は節尾調の下に接する時故平聲としてある。以上に依つて此歌に新符を施すと左の通りになる。

イナムシロ・カハソヒヤナギ・ミヅユケバ・ナビキオシタチ・ソノネハウセズ・

解(二) ウマラニのウマラは全平なれど例により●○○と讀む。其下の二(於)は古訓は上聲なれど現代では下聲である。ヲヤラフルは全上。カネは感動助詞で事實は●○である。倭は原書が倭を誤寫したもの。即ち左の通り。

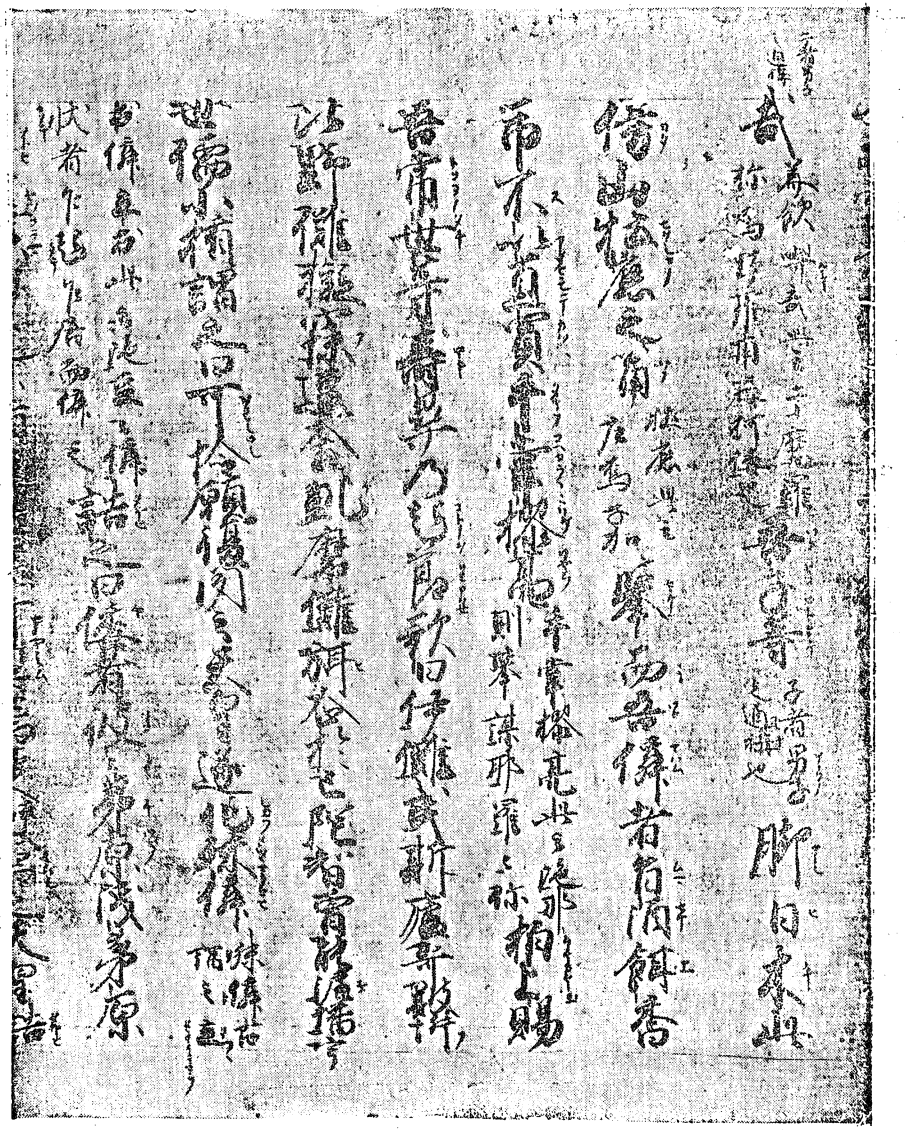
ウマラニ・ヲヤラフルカネ・

解(三) サヲシカ即ち全上である。

解(四) タナソコは所謂伏起式で事實は●●●●。モ(亦)は全下調助詞。ヤララは●○○。ニ(於)の古訓は上聲。即ち

タナソコモ・ヤラニ・

解(五) タツツは伏起式で、事實は全上調即ちタツツである。



百人一首寫眞解說

井上奥本

是は和歌三部抄の寛永時代の列丁綴古寫本中の百人一首の一部である。之も調符と片假名とは朱書であつて、二點を施せるは濁點である。今原文と改定調符とを同時に記して解說を後に廻すと左の通りである。

(一) 壬生忠見 ミブノ・タダミ

(二) 戀(コヒ)すてふ コヒステフ

(三) まだき マダキ

(四) 人(ヒト) ヒト

(五) 清原元輔(キヨハラノ モトスケ)
キヨハラノ・モトスケ

(六) 契(チキ)りきな チギリキナ

(七) まつやま マツヤマ

(八) こさし コサジ

(九) 權中納言 ゴンヂウナゴン

解(一) ミフは全上。ノ(之)には施點が無いけれども古法の「ノはつるる」の規則により上聲となる。(關西にては現代も同樣)。タダミは忠を二音に讀みタダミの三音にて一下調。但し忠は平聲なりしを上聲に誤寫せるならん。

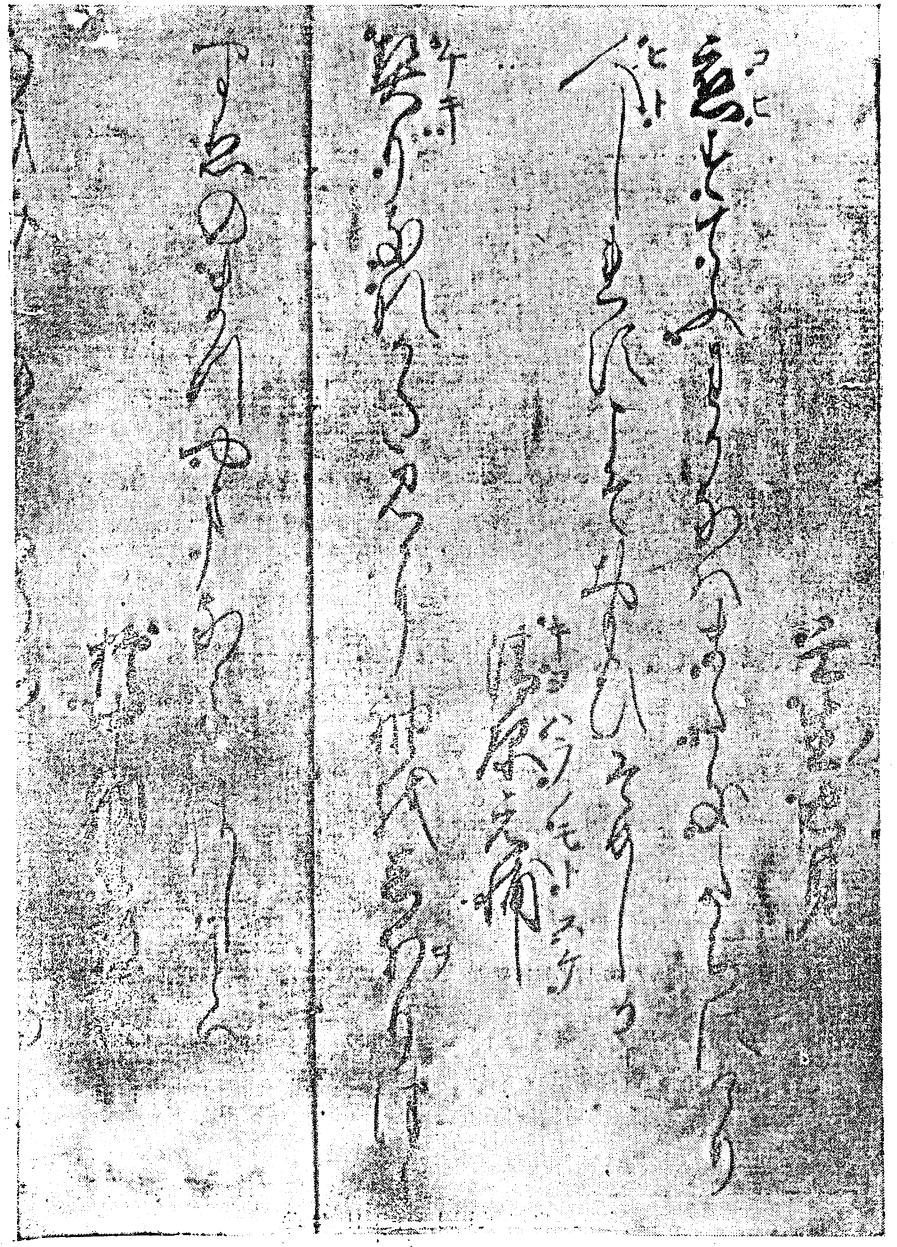
解(二) コヒステフは五音にて一單語。助動詞テフは元來全下調即ち熟語の上にて四下調。

解(三) マダキは古式は全平で事實は●○○。

解(四) 人は古調は●○で今は關東關西共に●▼である。唯佐久間氏の說は全上調。

解(五) キヨハラは二下調。ノ(之)には點なけれど前揭の原則により下聲。即ち五音にて三下調。ヨは節ではなくて框式の框であつて、キヨが上聲面、ハラノの三字が下聲面。モトスケは三下調である。

解(六) チギリキは熟語で三下調。ナは感動助詞であつて上聲であるが、節尾調ではない。節式に云ふ所の全平一單語である。節式にては之を平聲とし、伏起式にては之を下聲とする故、節式にては上のキと同高となり、伏起式にてはキよりも更に低くなる。



かくては全く事實に反する。

解（七）　マツヤマは熟語にて三下調。

解（八）　コサヅのジ（不）は書紀のウセズのズ（不）と同義の全下調である。熟語コサジとなつて一下調となる。

解（九）　七音にて一單語である。權の去聲符は去聲を顯はすものではなくて、例の伏起式を意味して居るのであらう。或は例の「上聲去聲相通」の場合ではなからうか。兎に角今は上四音を上聲面、下三音を下聲面と見た。ザウのウは節ではなくて上聲面の框である。しかし節式を主張する人は之を節と見做す所のものである。所で關東では長音尾は節とも框ともならないやうであるが、編者の地方では框とはなるが節となつた例を聞かない。しかし京阪から伊勢地方では長音單語に彼の去聲形のものが澤山あるから、之等が節となり得ることは小史の契沖師の條を見れば明である。